櫻井美智子先生を送る

小　林　祐　子

今年の3月櫻井美智子先生が定年退職され、卒業生の教員がまた一人牟礼から去っていかれた。あとに残るこの不甲斐ない後輩に、東京女子大学の "something" の灯を絶やさないでくれと言い残して。櫻井先生は、教育を受けられたのも、教職に就かれたのも、一貫してキリスト教主義の学校であった。1970年、短期大学部の助教授に就任されてから20有余年、常にキリスト者としての強い自覚をもって、教育に当たってこられた。

櫻井先生のご専門は言語学で、講義・演習では主として英語の統語論研究を取り上げて来られた。国内の研究会はもとより、アメリカ言語学会や国際言語学会の主催する言語講座には、休暇を利用してまめに出席され、目まぐるしくかわる理論的潮流をつかみとることに貪欲であられた。1989年のサバチカル・リーブでは、客員教員として滞在されたイギリスのレディング大学において、論理学の諸概念を統語理論研究に用いた新しい研究法に取り組まれ、言語分析にコンピューターを利用する方法まで仕入れて帰ってこられた。私などは、難解な新言語理論にはすぐ音をあげてしまうのだが、先生は知的挑戦としてこれを楽しまれるようなところがあった。なんといっても、新しいパラミーターによる言語理論の組み換えを理解するには、これまで受け入れてきた理論的枠組を解体するだけのしなやかな頭脳が必要である。その意味で先生は年をとられることがなかったというべきだろう。

統語論の分野においては、ご退任直前に『論集』に出された「Tag Question 再考」に例示されるように、言語現象を実証的に分析される研究手法を好んで使われた。私の個人的な偏向を許して頂けるなら、先生の研究者としての真骨頂がもっとも表れているのは、言語学がわが国に定着した過程を綿密に裏付けた歴史的研究のように思われる。例えば、明治19年に東京帝国大学に博言語学科が設置され、日本語学・言語学を講ずるためイギリスからチェンバレンが迎えられた当時の状況を考察した「言語学の明治草創期における B. H. Chamberlain」(東京女子大学附属比較文化研究所『紀要』第39巻)、19世紀前半に出された英和辞書を資料に、日本における英文法研究の誕生をさぐる「英文法事始—品詞論を中心として—」(同研究所『紀要』第47巻)などは、英語学の研究者が日本の言語学史の一齣をとらえたユニークな研究となっている。

上記の研究をされていたころ、入手困難な当時の資料を集められるのに、先生は文字通り日本中を駆けめぐられた。それでも満足されずにイギリス、オランダの大学図書館に問い合わせ、ついには自らこれらの図書館へと出向いていかれた。その執念に

は全く脱帽であった。

ここぞと決めたら、とことん調査・研究して、情報を集めるという先生のお陰で、私などは随分と恩恵をこうむった。もっとも私のことゆえもっぱら形而下的なことに限られるのだが。例えば、ちょっとそこまで一緒に旅行するなどというときでも、旅行社から盛大にパンフレットを集め、あちこち電話をかけて、列車やバスの時刻を確かめ、名所旧蹟、美術館、陶芸店、食事処の所在を徹底的に調べて、快適な旅が楽しめるように綿密な計画をして下さる。何か一つのことをおたずねしても、その周辺のことまで詳細に綿密に教えて下さる。何事においても、先生には労を惜しむということがないのである。

先生のこのサービス精神の恩恵を最大限に受けたのは、なんといっても学生たちであった。俗にいう「面倒見のいい」先生で、英文法は苦手だが、櫻井先生のもとで卒論が書きたいからという「不純な」動機で、先生のゼミをとる学生さえいた。閑古鳥がなくような私の研究室の隣に、いつも学生たちで賑わう先生の研究室があった。壁越しに聞こえてくる活発なやりとりを聞きながら、ここに女子大の教育が生きていると私は思った。先生の教え方には、学生たちが存分に質問できるように心理的壁をなくし、自由な討議の中で、ものの見方、考え方を方向づけて、知的な自立へと巣立たせようとする配慮があった。学生たちにもその熱意が伝わらないはずはない。卒業しても先生のもとで読書会を続けることを希望した学生たちがいると聞く。

先生は学科の枠を超えてさまざまな形で牟礼のため、大学のためにもサービス精神を発揮された。宗教委員長として、牟礼の宗教活動の活性化に意を用いられたし、オルガン委員、広報部委員、学報委員、英文要覧編集委員も務められた。特に英文要覧の編集では、退職が迫った２月、３月になっても、新しい大学院のコースの英語名と格闘され、最後まで櫻井先生流儀の徹頭徹尾主義を通された。

言語文化学科では、先生にはご無理をお願いして、ご退職後も非常勤講師として来て頂くことにしている。残る後輩たちが、無事 “something” の継承をしているか、先生には見守って頂かなくては困るのである。